

2026 年度 東播磨生活創造センター「かこむ」 運営委員会議事録

日時：令和 8 年 7 月 17 日（金）

13 時 00 分～16 時 00 分

場所： 東播磨生活創造センター「かこむ」

多目的パフォーマンススペースたばす

1. 運営委員会概要

任期：2026 年 6 月 1 日 ～ 2027 年 3 月 31 日

回数：年 3 回程度

目的

指定管理第 6 期目（2026 年度～）のコンセプト「やってみたいができる施設」の推進に向け、客観的かつ現場感覚を備えた外部プレイヤーの視点を運営に反映させることを目的として開催。今期は外部知見のインプットと既存事業の整理を軸に、次年度以降の事業計画立案へと活かしていく。

2. 出席者（敬称略）

[運営委員] ※五十音順

明石市 産官学共創課 係長

株式会社トーハク

特定非営利活動法人ブレーションヒューマニティー 事務局長

稲美町社会福祉協議会 事務局長

ARCH

メルとモノサシ 代表 / greenz.jp 副編集長

（個人）

[指定管理者・事務局]

NPO法人シミズシーズ センター長

副センター長

副センター長

コーディネーター

コーディネーター

コーディネーター

コーディネーター

井垣 祐介

市橋 英紀

片岡 一樹

坂口 智彦

三名 あたし

村崎 恭子

山下 和希

阪口 努

王 茂厚

大福 幸帆

大塚 郁美

小川 靖子

菅岩 あゆ子

坪根 理恵

3. 次第

- (1) はじめに 開会の挨拶と趣旨説明
- (2) 運営委員のみなさまの自己紹介
- (3) 「かこむ」より 2026 年度の取り組み報告
- (4) 感想共有
- (5) 運営委員のみなさまからの情報共有（事例紹介）
- (6) 今後の展開についての意見交換
- (7) 運営委員のみなさまから一言・閉会の挨拶

4. 議事録

次第(4)感想共有

委員 1 3、4 ヶ月足らずでここまでやっているのは本当にすごい。逆に、やりながら皆さんがどこに悩んでいるのか、どこにつまずいているのか、その裏側にある思考を聞きたい。

事務局 「やってみたい」のハードルを下げるために始めたが、深掘りしようとするほど「エリアを使うのにそこまで考えないといけないのか」と、逆にハードルが高くなっていると感じる。「ライトさ」と、スタッフと一緒に深める「一緒に作る」ことのバランスを模索中。

また、かこむのボランティアさんは二十人近く増えたが、かこむの中だけで活動が終わっていいのか、地域の中で手を止めている団体さんに彼らを繋いでいく、コーディネーターとしての「次のステップ」をどう提供すべきか模索している。情報発信においては、一方的にこちらが伝えたいことを伝えている状態。果たしてどれだけ広まっているのか、見る人が何を知りたいのか。見る側の気持ちをどう集めていったらいいかが悩み。

委員 2 広告は入り口を作ること、コミュニティは循環を作るもの。打ち上げ花火ではなくていいなという感想。尼崎の「ここにある」という会社がやっている、関わりを「知る・触れる」段階から「心を寄せる」「動く」「巻き込む」とフェーズを細かく分けることで、「これならできる」という居場所が見つけやすくなると思った。

委員 3 やってみたい作戦会議に個人で参加したが、AI で形に見えるところまで持っていくのは素敵な取り組みだった。明石でも「知りあい、語りあい、創りだす」という 3 ステップのグラデーションを整理したことがある。参

加する方が自分の動機やモチベーションを自分の中で形にできる仕組みがあるといいと思った。

委員 4 なぜ「やってみたい」をキーワードに出しているのかずっと考えていたが、私の中で整理がついた。かこむの目的は「自分たちのまちは自分たちでつくる」地域を目指すこと。そのための共有財（コモンズ）として、まちの人がかこむを活用していく。そのフィルターが「やってみたい」だと思った。だから、目的化せずに「やってみたい」を追求しすぎて溺れないようにしてほしい。スタッフが「こうしてあげる」ではなく、例えば広報誌だって、クリエイティブをやってみたい人たち自身が作る場所にすればいいと思う。

委員 5 やってみたいができる東播磨には「主体的な人」と「地域の受け皿」の2つが必要。ここで鍛えられた人が施設をはみ出して、地域のコーヒー屋のチラシを学生が作るような、小さな「おせっかい」の連鎖が街の受け皿をこじ開けていくのだと思う

委員 6 やってみたいを叶えるのを手伝うのではなく、その人なりの走り方を一緒に探す。広報は「私たちはこういう集団です」というものなので一方的でいい。広告（入り口づくり）との住み分けができていれば、悩むところではないのかなと思った。

委員 7 住民が行政にやってほしいという「消費者マインド」への危機感がある。財布に50円しかないような、今日食べるものに困っている人からは「やってみたい」は出ない。そのような層を支えるのが私たちの役目であり、主体性を取り戻す手伝いがかこむの役割としてあると感じた。「お前地域を巻き込むんちゃうぞ、巻き込まれに行くんや」という先輩の金言、自分たちの舞台に上げるのではなく、相手の土壌に乗り込んでいく姿勢も大事。

次第(5)運営委員の皆さまからの情報共有(事例紹介) ※順不同

- ・ 神山まると高専 <https://kamiyama.ac.jp/>
- ・ あすてっぷコワーキング <https://astep.city.kobe.lg.jp/coworking/>
- ・ ユースセンターズオノミチ <https://mukaishimaseeds.com/youthcenters/>
- ・ 下鴨ロンド <https://greenz.jp/2026/06/29/mypro-shimogamo-rondo/>
- ・ 共創自治区 CONCON <https://concon.kyoto/about/>
- ・ シェアビレッジ <https://sharevillage.co/>
- ・ TAKASHIMA BASE https://note.com/takashima_base/n/nb77fa7a94240

- ・Code for Japan「Toban」 <https://greenz.jp/2026/03/19/code-for-japan/>
- ・まちなね浜甲子園 <https://machinone-hamaco.org/>
- ・ミカン下北 <https://mikanshimokita.jp/>
- ・下北妄想会議 <https://mikanshimokita.jp/katsudo/detail/?cd=000021/>
- ・コミュニティコーピング <https://comcop.jp/>
- ・アマガサキトゥザフューチャー <https://amanism.jp/ucma/report/entry-461.html>
- ・みんなのタキビー <https://kakogawa.keizai.biz/headline/3157/>

次第(6)今後の展開についての意見交換

- 委員 1 公共空間でやっていると、なんでも「許可制」になってくるのが、ちょっと気持ち悪いなと思う瞬間がある。「ここでやってもいいよ」と許可を出すプロセス自体が、まさに「自治」っぽくないなと。例えばさっきのリカちゃん人形の推し活も、やりたい人が勝手にやったらいい。誰に許可をもらう必要もないのに、わざわざ許可というプロセスを踏むのが変だなと、思っていて。だから私は最近、「ゲリラでどうやるか」をデザインすることが大事だと思っている。イギリスの「スコッター（占領）」のように、あえて無理やりやるような過激なエネルギーも、自治には必要かもしれない。かこむにも、そんな要素が入ってくると面白いんじゃないかな、と感じた。
- 委員 6 「勝手にやってもいいのに許可しないといけない感じになっている」というのはすごく刺さった。スタッフの皆さんは、この言葉を聞いたときどう感じたか、無意識に習慣的に「許可制」を取ってしまったのかな、という自覚はあるか。
- 事務局 県との関係で言うと、指定管理の中で事業の許可をとることはない。しかし、こちら側で「後で何か言われるのは嫌だな」というものに対しては、無意識に先手を打って確認する習慣は確かにあるかもしれない。許可制の話で言えば、もともとは県もすごく厳しかった。そのため、市民寄りの立場で「こういう使い方がいいんだ」と県を説得する関わりをずっとしてきた経緯もある。その積み重ねがあって、最近ようやく理解を得られてきた。だからこそ今後は、この空間で「何でもできるんだ」ということを、もっとアピールしていきたい。
- 委員 4 具体的な方法として、新しく設置する木枠ごとに「テストメンバーシップ」を作ってみては。1つの枠に10人くらい、すでにやってみたいと言っている人たちに入ってもらい、そのエリアのルール自体を自分たちで話し合っ決めてもらう。全員の合意を得るというプロセスを経て、「ここ

だけは何をやっても許される」という場所をみんなで作っていく。権限を委ねるステップとして、今すぐできることだと思った。

委員 5 自由が理想ですが、合意を持続させるためにはルールが必要なこともある。でも大事なのは、その「ルールの発生過程」すらもメンバーに委ねてしまうこと。そうすることで、これまで公共施設にはなかった「自治」が入ってくるのではないか。

事務局 ルールが「禁止事項の積み上げ」になって固定化される状態にはしたくないと思っている。合意を持続させるために、ルールを常にアップデートし続けていく。その「かき回し役」としてのスタッフの役割が必要なんだろうな、と聞いていて思った。

委員 3 豊田市の「みんとしょ」では、一箱オーナーが自分たちで場所を守りルールを作る「マイクロオーナーシップ」を実践している。お金をかけるのではなく、自分ごと化して場所を守る姿は、今の話と通じるものがあると感じた。

次第(7)運営委員のみなさまから一言・閉会の挨拶

委員 1 「公共は常に私発（わたしはつ）」という言葉が好きで、さっきの図（事業全体像）で言うと、真ん中に「私」があって、それがどんどん広がっていくと公共になっていく、身近なところから貢献に繋がっていく。やってみたいをなぜやるのかという意義は、まさにそこかなと思っている。特に公共施設だと「ニーズがないとやってはいけない」という意識が強い。しかし、一人がリカちゃんのことをずっと好きで、リカちゃんの推し活をやり続けていくことにだって意味がある。それをやっている、実はリカちゃん好きな人が集まってきたり、そこで繋がったら「こんなことで困っている人がいて」という話が出てきたりして、ちょっとずつ根拠っぽくなっていく。この場所で「とりあえずやれる」場所を作っていくことは、そこから施設の「外」で勝手に何かやりだす人が増えてくることに繋がっていく。それが最終的には市民参画とか自治に繋がるのかなと思っている。

委員 2 今、「自由と制限のグラデーション」について日々悩んでいる。自由にしすぎても答えが出ないパターンもあるし、制限をつけすぎると思考が停止してしまう。そのバランスをどう取っていくかが、かこむさんがこれから作っていかれるところかなと。もう一つ、「自分たちのまちを自分たちで作る」という言葉が、遠い存在に感じる人がすごく多いんだろうなと思っていて、「まちは行政が作るもの」と思っている方への入り口の作り方をどうするか。その辺り、私も参考にさせていただきたいことがたくさんあった。

- 委員 3 一過性にさせない「やってみたい」の循環の仕組み、というお話に共感した。披露する場所、街のネットワークにつながっていく仕組みが必要。そのためには、ジャッジして決めるのではなく、とにかくやってみる、実験することを許容する、「自由なこと」が多くここでできたら楽しいなと改めて感じた。
- 委員 4 私からかこむへのメッセージは、「手放してみよう」という言葉。かこむそのものを、やってみたいまちの人たちに委ねてみる勇気。かこむを作るのはまちの人たちであるべきで、理想を言えば、この運営委員すら、外部の人ではなく「かこむを作っていきたいまちの人」によって構成されるようになること。まずはできるところからみんなで作ってもらい、任せてみる、というのをやってみてほしい。
- 委員 5 やってみたいの次のステップとして、「おせっかいをどう増やすか」がキーワードなのかなと思った。利他だけでは続かないし、自己中心だけでも誰のためにもならない。でも、自分の「やりたい」というところから他者に良い影響を与えていく、自己中心的利他という人を地域で増やすためにも、まずは「自己中心的になってみよう」という「やってみた」はすごく大事。そこから地域の中にしみ出していく循環ができるといいなと思った。
- 委員 6 「溺れるのが自然」です。溺れないようにという言葉も出ましたが、どんな集団でも一度は溺れるもの。その時に私が気をつけているのは、溺れている状況だと気づいたら、自分は「浮き輪を投げる役割」に回るということ。センター長が浮き輪を投げるタイミングを見計らう、そういう立場の責任があるのかなと感じた。
- 委員 7 かこむは、人がいる「ふらっとした場」になってほしい。私は「キャプテン翼」世代で、学校が終わって裏の空き地に友達と行って、「直角シュート」とか「鋭角シュート」とか、役に立たないシュートをああでもないこうでもないみんなで考えていた時がすごく楽しかった。大人になって難しいことを言うようになったが、本能的なところは変わっていない。そういう役に立たないことでも熱狂できる「心理的安全性のある空き地」。かこむがそういう場であってほしい、と期待を込めた感想。
- 事務局 「コモンズ」という言葉が、やってみたいと同じくらい何度も出てきた。かこむにはすでにその下地があるので、それをどう具体的に活かせるかを考えていきたい。
- 事務局 「まちの人がかこむをハブとして、ツールとして使ってくれる」という視点を全く考えていなかった。手放す勇気もそうだが、来てもらうための

「かこむの魅力」を自分たちでしっかり考えていけないと感じた。

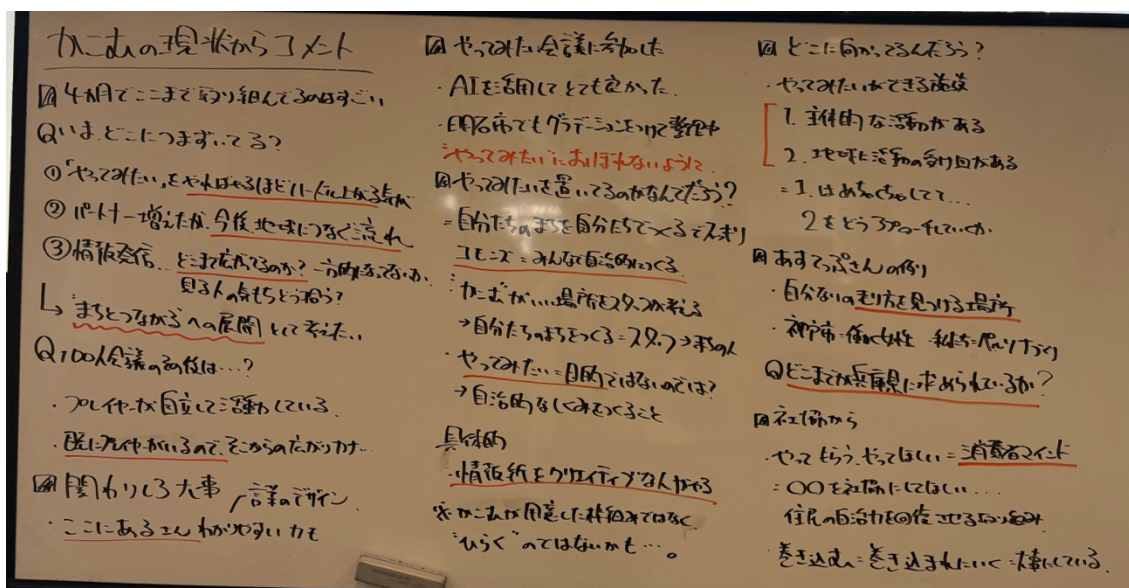
事務局 心に刺さったのは「なぜ許可を取らないといけないのか」という話。明日から窓口で「ゲリラ的にどうやるかを一緒に面白がる人」になりたい。

事務局 「やってみたいに溺れない」という言葉が目から鱗だった。

事務局 最初「やってみたい」一色だった議論が、最後は「コモンズ」という言葉に変わっていった。狙ってコラボを作るのではなく、偶然そうなった、というのが大事。それが起こるのは、何でもできる環境、ブレーキをかけさせない環境だからこそ。「戦略的に手放す」「あえて何もしない」ということを大事にしていきたい。

事務局 「支援がブレーキになる」「じゃない方の人（声を上げていない人）」への配慮は必ず入れないといけない視点。手を差し出しすぎず、相手が育つのを邪魔しない絶妙な距離感を、今後の事業に取り入れていきたい。

[次第 (4) 感想共有 板書]



5. 添付資料

資料① 2026 年度 取り組み報告スライド